

目次

第16回大会開催について	P1	在外会員通信	P8
2003年度秋季研究集会	P1	2003年度研究会開催報告	P10
IIS世界社会学大会関連	P3	会員の研究動向	P10
第15回大会特別講演(2)	P4	事務局から	P10
日中研究者ネットワーク	P6	会員異動	P12

第16回大会開催について

大会担当理事 飯田哲也

日中社会学会第16回大会については、これまでの大会の延長線上に位置づけながらより豊かな発展を目指して、次のように提起いたします。まだ修正の余地があるので、意見のある方は具体的に提案して下さい。3月末に最終的な確定の予定で準備を進めています。

日時 2004年6月5日(土)、6日(日)

場所 愛媛大学

・プログラムの概要

<第1日>

1. 特別報告 今回は質疑・論議の予定
2. 書評セッション 3. 総会 4. 懇親会

<第2日>

5. 自由報告
  6. シンポジウム テーマ: 現代中国の生活変動
- 自由報告については、大会準備の円滑化のために以下のように致しますので、報告予定の会員は注意して下さい。

<申し込み>の〆切は 3月12日

“はがき”で報告テーマを。なお、提出された報告テーマの変更はできません(副題の変更は可)。

<報告要旨>の提出〆切は 4月30日

「報告要旨」の書式を以下のように致します。

すべての報告要旨は、A4用紙 横書き  
2ページ 1ページの字数は縦40×横40

とします。そのまま複写されることを念頭に作成すること。それ以外の資料については大会当日に各自で用意・持参すること。

宛先: 603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学産業社会学部 飯田研究室

問合せ先: 大谷大学総合研究室 鈴木未来

電話: 075-432-3131(内)3307(2004.3.31 まで)

ご意見については、飯田まで

FAX: 075-465-8196 E-mail: tit01567@ss.ritsumei.ac.jp

2003年度秋季研究集会「中国への問い・中国からの問い」

中村則弘(第16回大会実行委員長)

「中国への問い・中国からの問い」という共通テーマのもと、秋季研究集会が2003年18日に大阪市立東淀川勤労者センターで開催された。報告内容は総り豊かなものであり、発表者とフロアーの質疑応答も予想を超えて活発であった。司会を行った立場からいえば、傲慢なようではあるが、もはや日中社会学会は新たな段階に入ったと断言できる。さらにいえば、日本における中国社会研究の学会という独特の位置を活かし、世界までも睨んだ活動展開を考える時期に立ちつつあると実感した。

さて、報告の内容紹介とコメントに移ろうと思うが、その前に、根橋正一会長に率直な敬意を表したい。若手の報告者と同じ土俵で真摯に議論を行うその姿には、若い学会の力をみた気がした。

第一報告は滝田豪会員(大阪国際大学嘱託講師)による「中国農村における基層政権の性格変容」、第二報告は東美晴会員(流通経済大学助教授)会員の「日本における宗族研究の課題と展望 終焉からの宗族論」、第三報告は根橋正一会長(流通経済大学教授)の「中国的『公

公共性』研究の意義と可能性」であった。なお、これらの報告は、どれもが現地調査データによっており、実証研究としての重みをもつものでもあった。

滝田報告は中国の「公」と「私」、「公共性」の問題を提示しつつ、村民自治や超級村庄の現状にみる人民公社解体以降の基層政権の再組織化から、農村共同性を腐蝕させる公的枠組みの不安定要因を析出するものであった。その要因は、1. 村民の就業機会の多様化、2. 村幹部の縁故主義という二つであり、それらから中国における国家、コミュニティ、家族による「公」の重層的な存在可能性を指摘している。中国農村の実証分析から「公」の重層性が推論されたこと、超級村庄などはその成功の枠組みゆえに「公共性の危機」を内包せざるを得ない帰結に陥ること、などの内容は極めて重要な知見である。

東報告は、これまでの宗族の議論では語られることがなかった民間医療や武術集団における家族・宗族組織の擬制的なあり方を分析したものである。これら組織の構成や実践についての調査結果と参与観察から、宗族研究において「観念としての宗族」に着目する必要性が主張された。家族・宗族にかかわる社会関係を認知させる上で、メディアのなかで再生産される宗族イメージが重要な意味をもつのではないかと指摘は、新鮮な思いを抱かせるものであった。確かに、民間宗教と演義との関係などを考えればあり得ることである。

根橋報告は、自身の上海研究を批判的に見直し、自らもとらわれがちとなったオリエンタリズムからの脱却への道筋の端緒を探ろうとするものであった。問題提起的な報告であったが、その意図するところは大胆であり、中国社会研究の意義への問いかけにもつながる内容であった。氏は中国的な公共性について、租界期以来の上海の事例から「共同」に向かう強い志向の存在に着目し、中国に固有な論理をもつ公共性の可能性を考える場合、

この共同志向を踏まえた議論が求められることを主張する。あわせて、支配におけるヘルの政治的徳性、官僚の人格的能力が正当性を付与する基盤となっていることを指摘し、「封建末期の名望家指導集団」、「明清時期の郷紳と民衆暴動」、「秘密結社と同郷組織」にかかわる研究のなかに、中国的な公共性を見出す糸口を求めている。

続いての質疑応答は、フロアーからの質問内容を用紙に記入してもらい、それに報告者が返答し、さらにフロアー全体で討議を進めるという形をとった。質問は滝田会員、根橋会長の報告にかかわる公共性と、東会員にかかわる宗族の問題に集中した。

公共性についての質問内容を要約すると次のとおりである。

1. はたして、家の「公」というのは実態なのか。
2. 50年代の集団化は「持ち寄り関係」によったというが、歴史をふまえれば高級合作社以降は強制的であったことは自明であろう。
3. キーワードである「私」、「公」、「公共性」、「国家」の関係や位置づけが理解できない。滝田報告については「国家」がからんだときの「公」の位置である。現在の中国の経済状況などからは「国家」と「公」が対立をはらむのではないか。根橋報告については、報告中の「公共性」が「国家」や「私」の領域とどのように関係するのかである。
4. 『私』のなかからの『公』ということでは、農民と幹部の分離化をいえるのか疑問である。実質的なキーマンに着目する必要があるのでは。分離と言うことでは、派遣で赴任する基層幹部もいることを念頭に置く必要がある。
5. 「他律性」と「自律性」という基準からみた農村自治の方向性はどうか。
6. 現状において「村の『公』」があることは承認できるが、民国時代におけるその存在についてはどう思うか。

宗族についての内容を同じく要約すれば、次の通りである。

1. 報告の事例となった上海における宗族の地域性・特殊性を位置づけて欲しい。
2. 宗族との関連で武術門派の分裂要因はどう捉えられるのか。

これら各事項に対しては、報告者からの真正面からのリプライが行われ、さらに、報告者と質問者を含めたフロアーとの間での活発な議論が展開された。また、質問については、フロアーから随時によるものも多数あった。これらの質疑応答や随時の質問には極めて興味深いものがあったが、膨大かつ多岐にわたるため、ここでは割愛することとした。

以上の報告と質疑応答のまとめとして、企画運営者の一人である首藤会員が全体コメントを行った。本来これは司会者が行うべきことであるが、日中社会学会の将来への期待を込めて、企画運営で骨を折ってもらった首藤・鈴木の両若手幹事に集会を締めくくってもらうこととしたのである。

首藤会員からは以下のような興味深いまとめと提起がなされた。1. 理念的問題にまで踏み込んだ討論まで行われ、「神々の戦い」のようで熱いものがあった。西欧近代への問い直しが議論の俎上に上っている。2. 三つの報告を踏まえて言えば、宗族は私的なものが公的な装いをしていたりする。頭目であり、ある面での名望家は、私であっても公になる。その背後には人格的評価があることを認めざるを得ない。3. 研究集会での議論からみると、公共性の上位概念として協同性を考える必要がある。協同性と公共性のせめぎあいという「対抗的相補性」のダイナミズムを念頭におくと、中国の公共性の議論、とりわけ超級農村の村民資格などの二項対立の構造も見えてくるのではない。

最後に、司会者としての意見を一点のみ記しておきたい。それは、西欧的な公共性が中国社会に関しておいてなぜ取り上げる意味をもつのかを積極的に示す必要があるのではないかとということであり、また新たな概念の提示への挑戦も恐れてはならないのではないかとということである。

寡聞を恐れずにいえば、欧米の中国研究で

は 1990 年代において、「公共領域」概念が中国社会には妥当しないということで一応の決着をみている。だが、研究集会での議論からすれば、決してそうとも言い切れない。中国社会の歴史的特殊性に対するしっかりとした視角をもてば、新たな、独特な形での議論展開が可能のように思えた。

だが一方で、歴史的現実との乖離を承認しつつ、特定の分析概念に拘泥することは、不毛な結末しかもたらさないようにも思える。今回の議論の到達点からみると、西欧近代の普遍性との鋭いせめぎあいがみられ、もはやわれわれの歴史認識力、さらには概念提示能力が鋭く問われていたことは間違いない。集会での議論の盛り上がりからは、日中社会学会の活動のなかにこそ、こうした側面にかかわる成果が求められている気もしてならなかった。

## IIS 世界社会学大会関連

渉外担当幹事 首藤明和

2004 年 7 月 7 - 11 日、中国社会科学院社会学研究所の主催で、北京にて国際社会学機構 (Institut International de Sociologie) 第 36 回世界社会学大会が開催されます。日中社会学会は 3 つのセッションをエントリーしております。

・ **Social Welfare and Social Security under the Social Transformation in East Asia (Session 28)**

・ **East Asian Society and Globalization (Session 73)**

・ **Beyond the Orientalism: From East Asian Perspective (Session 74)**

なお、参加者にたいする IIS 大会主催者からの連絡・要請事項などについて、とくに日中社会学会が取りまとめを必要とすることがらに關しましては、適宜、セッション担当者 (東美晴会員・鈴木未来会員) IIS 担当幹事 (首藤) よりご連絡いたします。また、大会の詳細につきましては、中国社会科学院の公式 HP (<http://www.iis2003beijing.com.cn/>) にてご確認ください。よろしくお願ひ申し上げます。

日中社会学会第15回大会 特別講演  
「現代漢民族の民俗宗教 とくに童乩信仰をめぐる」(2)

講師 佐々木 宏幹(駒澤大学名誉教授)

漢民族社会の社会 宗教的状况と童乩信仰

次に の多民族社会の社会宗教的状况と童乩信仰というところに移らせていただきます。社会学会でありますから、あまり宗教観念やアイデオロジーの話だけではご満足頂けないでしょうから、私の方で調べた社会の状況やあり方と、童乩信仰の関係を述べさせていただきます。

シンガポールの人口はご存知のように400万人を超えましたが、私が行ったころはまだ250~60万人でした。漢人の割合は大体76パーセントほど。ご存知のようにシンガポールは福建、潮州、広東、海南、客家の人々が構成しておりまして、70年代のころは華人はモザイク状に住んでおったんです。方言集団でありますから、言葉が通じない集団に住むよりも、自分達の言葉の集団に住もうということになって、大陸からそこに移動してきた華人たちを、客家なら客家の華人の人たちは非常にお世話したんですね。自立できるように。なになに会館なんていうのは、専門の研究もありますけれども、この中には学校や福祉施設、病院などがあるわけです。ところが60年70年代になってリー・クワンユウが首相になりますと、「こんなにバラバラの5つの小さな国を作ってもらっているのは困る」と、「シンガポリアンの国を作りたいんだ」と。そのためにはそうしたモザイク状にバラバラになっている、例えば客家や福建などを全部解体させて、大きなマンションに入れる。そこにはマレー人もインド人もタイ人も台湾人も皆で住んでいる。それが大改革だったわけです。そこで今までジャングルや湿地だったシンガポールの北の方に大きな団地を作りまして、強制的にそこへ送り込んだのです。すると今まで方言で話し合っていた依頼者 童乩関

九楼拿督公廟というのを作ってマレー人の神と華人の神、それとインドのヒンドゥー教の神を3つ一緒にお寺にお祀りしたわけです。そうしてインド人が来たらインド人の神、マレー人が来たらマレーの神で対応するようにしたわけです。そういう素早っさがさっき言った民俗宗教のある種の典型的側面だと考えます。ここでは激しいトランスが特徴です。

ところが、西マレーシアを調べてみますと、あそこは一神教が支配する厳しい掟のイスラムの圧倒的な影響下にありますので、ここでは一方では伝統的な童乩信仰が維持されておりますが、他面、大都市を中心に儒・仏・道三教の三位一体、ですからキリスト教の神観を借りてきて、「神と子と精霊と」と言う代わりに儒・仏・道を使って、これは三位一体なんだと説く童乩が現れます。これは日本でいろいろ問題にされている例のカルトと比較すると非常に面白いと感じております。一種のカルティックなグループを作っていくのです。そこでは客家だとか広東、福建だとか民系に分かれておってはイスラムに抵抗できないのですから、それを先取りして一神教に近い神観を作りだし、民系を超えて神に帰依せよと大々的に宣伝する新宗教が現れます。これが黄老仙師慈教。これが戦後に生まれて、今では伝道活動をしまして、かなり数が多くなって、マレーシアからシンガポールまで浸透している。シンガポールでも3つの廟がございますから、黄老仙師慈教は国際的に広まっている。

次はフィリピンに参ります。ご存知のように、フィリピンは福建人が漢人社会をなしているといえます。人口が7000万人としてその1パーセントぐらいが漢人。その70万人の中45万人ぐらいがマニラの首都圏に住んでおり

ます。ご存知の通りここはカトリック文化が強いところで、85パーセントぐらいがキリスト教、というところです。そこで童乩は何をしたかと言いますと、仏教、道教、キリスト教、イスラム教の諸教を全部祀ります。そして教義をつくりまして、もともと最初は一つの宗教であったのに、人間が勝手にキリスト教だ仏教だと分けたのであってもともと人類の宗教は一つだったということまで持っていくわけです。そして65体の大量の神仏像を拝ませている、というのがあります。ここは大千寺というマニラの有名な大きなお寺なんです、やはりカルト的性格を持つ。イスラムは入っていないみたいなんです、フィリピン人やカトリックの人は入ってるんです。マニラの漢人を何人が尋ねてみたところ、おじいちゃんから父さんあたりは儒教と仏教と道教、今の若い世代はそれにプラス、キリスト教、そして子どもの世代になるとキリスト教で、仏教、道教はどっかへ行っちゃおうという場合も出てまいりまして、やはり漢人社会の人々自体は変動する移住地の社会に対してダイナミックに適應する、その意思と行動が見られます。

台湾は大体シンガポールタイプだと見ておりますが、漢族が支配的なこの国は、童乩の儀礼過程や役割は先程ありましたシンガポールに類似する。軽微なトランスと書きましたが、ここでは極めて強いトランスも両用使い分けておいて、やはり漢人が圧倒的に多い社会と少ない社会、あるいはイスラム教、キリスト教などの宗教によって、宗教形態を容易に変えることができる。そうした実験場みたいなものが見えたわけであります。

さて、先程申しましたように、96年から98年の3度、そして99年から2000年の2度にわたって、文部省科学研究費を10何人の人々に受けることが出来まして、私は童乩のルーツがどこにあるのかを調べることになりました。古典を調べてみたところデ・フロートという人が100年も前に福建にいたということ

を書いております。そこで20年程前に福建に行き調べた時は「そんなのはもういないんだ」ところがこの前に行った時はそういう童乩たちがたくさんいた。実は、文化大革命で大きなところは殆ど倒されたのですが、村の人や街の人はひっそりと童乩を囲ってやっていた。だから怪しげなものだということで政府に弾圧されますが、弾圧されてもまたしばらくするとひょっと出てくる。ここでは童乩という言葉が使用されるのは福建省の「アモイ」と周辺地域に限られます。それから旧満州の「ハイラル」というロシアとの国境近くまで入ることが出来ました。そこではエベンキー族という少数民族が漢族と一緒に住んでるんです。実はシャーマンという言葉はエベンキー族の「サマン」という宗教者から出たと言うのが定説になっております。それをなんとか見たいということで2000年の8月に入って「オミナーレン」という儀式を見ることができました。

#### ・まとめ

さてまとめとして、童乩信仰というものにおける「力」に触れます。力( *li, la* )とよばれるものは、神の特質そのものなんだということ。では神とはなんだと言うと、「力」であると。これは1955年にエリオットと言うイギリスの人類学者が、そのことをうまく細かく調べた古典的な名著をだしております。それでこれは、本学出身の安田ひろみさんと杉井純一さんが『シンガポールのシャーマニズム』と言う訳本を春秋社から1991年に出しております。そこでは童乩という言葉を使っており、童乩信仰をカルトとして理解しようとしている。その中で、「神は力だ」ということを何度も例証しております。私は日本の宗教の特質は何だろうと、色々見てみますと、最後はやっぱり「力」に行き着くんだろう。ところがその「力」が観音や釈迦などの「人格」や観念や思想に制限されない場合はどうなるかということ、力そのものは物理的、無個人的、

無性格的でありますから、力を表面に出すような宗教ではどのような個性化も象徴化も可能です。つまり性格が無いんですから仏教もイスラム教もキリスト教も全部受け入れてもなんら矛盾にならない。そこで漢民族の民俗宗教の寛容性とか包容性、習合性、別の面から見たら「だらしない」ように見えるかもしれませんが、あらゆる矛盾的なものをも一つに含むような性格は、優れて童乩信仰における、「神」＝「力」という観念や思想と連動しているのではないかということです。

次に華僑の現地への適応力。繰り返しになりますが、どこへ行っても、彼らはチャイナタウンを作って成功しております。あまりに成功しているマレーシアなんかでは、政府による漢人の弾圧が起きております。その土地で生まれたものを最も優先すべきであるという有名プミプトラ政策、国立大学に入るにし

てもマレー人は 100 点取れば入れるのだが、漢人は 110 点取らないとは入れない、そういう政令を出したためマレーシアから有能なチャイニーズがアメリカやオーストラリアに逃げていったと言う話も現地で聞きました。今日でもそうなのか詳しいことは定かではありません。こういった適応力は、今まで述べたようなマナイズム、シャーマニズム、アニミズムなどといったような、むしろソフィストケートされない以前の極めてプリミティブな宗教生活というものと関わってはいないだろうかと考えています。みなさんはむしろ漢族や中国の専門家でいらっしゃるから、私に問題提起をしてくださって、これは違うんじゃないかと、民俗宗教ではなくこういうものが今の漢民族の人々の生活には求められるんじゃないかと、そういったものがありましたら、この後でお教え願いたいと思っております。

## 日中研究者ネットワーク ~ ~ ~ ~ ~

### 李 強 先生

今回ご紹介する李強先生は、現代中国における階層研究の第一人者であり、その活躍の場は中国国内にとどまらず欧米や日本にも及んでいます。昨年 10 月に国際フォーラム出席のため来日中のところをお伺いしました。(聞き手：鈴木)



鈴木(以下 S)：先生の経歴を教えてください。  
李(以下 L)：1950 年の北京生まれで 68 年高級中学を卒業後、黒龍江省に下放していました。文化大革命が終わり、78 年になってから中国人民大学へ入学、当初は国際政治学を専攻し 85 年に法学の修士号を取得しました。社会学を専門としたのは大学院修了後で、85 年から 99 年まで人民大学の社会学部で教鞭をとりました。その間の 90 年から 91 年にかけてイギリス・ブリストル大学に留学し本格的に社会学を習得、帰国後の 95 年には博士課程

学生指導資格を取得しました。1993 年からはアメリカや香港の大学での外留経験もあり、日本にも数回研究のため訪れています。99 年からは清華大学に新たに設立された社会学部に学部長として移り、現在は人文社会科学(大学)院の院長を務めています。

S：先生が社会学を専攻するきっかけは何でしたか？

L：経歴のところでも触れたとおり、高級中学を卒業したときは文化大革命の真っ只中で社会学を勉強するどころか大学に進学することも出来ませんでした。文革後、ようやく大学

に進学することが出来ましたが、まだこの頃は社会学の研究は始まっておらず、海外事情に関心があったので国際政治を専攻しました。政治学を学ぶうちに階層、特にホワイトカラーのもつ政治力が社会発展の鍵になることを感じるようになりました。法学の修士号を取得した85年ごろは、中国においても改革開放が軌道にホワイトカラーの存在が無視できないと考えるようになり、社会学の分野で教鞭を取る事を決心しました。実際に八十年代後半から中間階層が育ち始めるとともに、階層間の格差の拡大が始まりました。そこでホワイトカラーの動向に着目するだけでなく、中国社会の階層構造そのものを解明する研究へと移っていったわけです。

S：最近の先生の研究を拝見していると、階層の特徴や動向を分析するにとどまらず、雇用問題や流動人口問題、貧困問題と階層との関係を明らかにするといった従来の階層研究の応用研究が目立ちますね。

L：ええ。これまで中間階層というとホワイトカラーというイメージが強かったのですが、中国の社会変動の文脈にあてはめると必ずしもそれだけとはいえません。戸籍制度によって中国は長年、農村と都市の区分を維持してきたわけですが、改革開放の進展によって農村と都市の間の流動が実態面では活発化していますし、制度面でも少しずつ変更が加えられてきています。中国の場合、都市化が進展するといっても単純に都市人口が増えるわけではありません。従来の農村と都市の間の中間地帯に居住地などの人のかたまりができるわけで、このような中国型の都市化の過程では、出稼ぎ労働者など必ずしも定住するわけではないホワイトカラーとは異なる人々も含んだ中間階層が形成されてきています。この特徴を把握するためには階層そのものの分析も必要ですが、そのような階層が形成される原因でもある戸籍や就職に関する制度面から

のアプローチも必要になるわけです。

S：99年に、長年在籍された人民大学から清華大学へ移られたわけですが、研究スタイルは変わりましたか？

L：清華大学はもともと自然科学系の大学でしたので、研究成果の応用ということが求められる環境ですね。私自身も国家衛生部や情報化関連の政策立案にたずさわっています。

S：最後に日本で中国研究をおこなっている研究者にメッセージを。

L：とにかく近年の中国社会の変化は早いです。変化の速度に常に対応することが重要です。他方で、中国は人口も国土もその規模は広大。場所によって速度が異なることも考慮すべきです。例えば「西部大開発」は速度の速さが引き起こした弊害を解消するためのプロジェクトですが、東部の変化の速度と同じレベルでプロジェクトを進めて短期的な成果を求めるのでは中国の実態にそぐいません。30年、50年のスパンで考える国家プロジェクトとして捉えるべきでしょう。

S：お忙しいなか、ありがとうございました。

#### <李先生の主な研究業績（著書のみ）>

- 《转型时期的中国社会分层结构》黑龙江人民出版社2002年1月出版
- 《我国失业下岗问题对比研究》清华大学出版社2001年9月出版
- 《社会分层与贫富差别》鹭江出版社(2000年9月第一版)
- 《生命的历程：重大社会事件与中国人的生命轨迹》浙江人民出版社(1999)
- 《当代中国社会结构和社会关系研究》首都师范大学出版社(1997)
- 《中国扶贫之路》云南人民出版社(1997)
- 《应用社会学》中国人民大学出版社(1995)
- 《市场经济、发展差距与社会公平》黑龙江人民出版社(1995)
- 《当代中国社会分层与流动》中国经济出版社(1993)
- 《社会运行导论》中国人民大学出版社(1992)
- 《中国大陆的贫富差别》中国妇女出版社(1989)
- 《社会指标理论研究》中国人民大学出版社(1989)
- 《社会调查研究方法概论》国际文化出版公司(1988)
- 《社会学原理》国际文化出版公司(1988)

## 在外会員通信

黄土高原における「生態文化回復プロジェクト」した。複雑系的手法といても、確立されたものと構成的参与調査について

深尾葉子(大阪外国語大学・天津日中大学院)

今年の4月より、中国天津をベースに一年間、JICAのシニア海外ボランティアとして、活動する機会を与えられ、現在も続行中です。

詳しい派遣の経緯や、派遣先の状況などをご報告しようかと、別途文章を書き始めたのですが、今回はむしろ、現在進めているプロジェクト型参与調査についてご報告したいと思います。

まず、10年あまり続けている黄土高原の調査ですが、昨年度からは「生態文化回復プロジェクト」を地域の人々と進めるということを通じて、参与調査というより「構成的実験」(対象社会を自らも構成しながら観察する)を行っています。

私が10数年来かかわりを持ってきた、黄土高原の陝北地区は、激しい水土流失や打ち続く旱魃、現金収入が少ないことによって余儀なくされる出稼ぎ、など一般的には「貧窮落後」を堂々と称している地域です。しかしながら、私を含め現地を訪れた多くの人々は、同地域の持つ独特の魅力、人間関係のありよう、社会のもつ生き生きとした側面、一見素朴だけれどもどんなご馳走よりも美味しい料理、、、などに魅せられ、その地域から多くのものを学びつつ、その地域に通いつめることとなっています。こうした魅力については、共著『黄土高原の村』(古今書院)などでも紹介を試みているほか、現地から多くの芸能団を招聘したり、日本からも窟洞生活体験ツアーを組んだり、といった双方向の活動によって、伝える努力をしてきました。しかしながら、そうした「交流」のみではなかなか地域の持つ悩みや不安定性を解消することはできず、新たな段階が必要であることを痛感してきました。

ちょうどそんな時期、長年の友人である複雑系研究者がこの地域を訪れたことがきっかけとなり、複雑系的手法による生態回復プロ

ジェクトをやってみようということになりまして。複雑系的手法といても、確立されたものが今のところあるわけではなく、人間社会も人間をとりまく環境も「複雑系」であるという思考のもとに、何らかの参与や観察を進める、というものです。そのヒントは例えばエドガール・モランの『複雑性とは何か』(国文社)に大変よくまとめられています。現在我々が一つの指標として考えているのは以下のようなものです。

**対象に直接作用するのではなく、できるだけ「間接的」アプローチを採用する**

「間接的」と称する場合、できるだけ事態を進展させているコンテキストへの働きかけを重視する(ベイトソンの思考)物事は「共依存的」に進展するので、調査にしても、プロジェクトにしてもできるだけ、あらかじめ定まった計画やプログラムを想定せず、共依存的に変更、発展する。また一方が一方に指導するという関係ではなく、外部から参与する者も、地域の人々も共に影響しあいながら変化する過程をイメージする「扶貧」や「植林」を目的として達成しようとするのではなく、全体として地域が物質の良性「循環」回路に乗るために必要な社会的、技術的变化をもたらすよう働きかける外部のものを持ち込む場合には、できるだけ地域に存在する社会的、文化的リソースとの接続を重視する

これらは、具体的には、例えば以下のような活動を行うことにつながっています。

生態回復といいつつ、直接植林するというような活動はしない。地域で植林している人たちに接続し、彼らが必要としている力やリソース、情報を接続する。例えば廟会で植林している人たちをネットワーク化して、相互に植林技術を伝えたり、外部との交流を図る。その際にインターネットなどを利用して交通不便なところに位置する彼らの活動を外部の人々に知らせるなどの協力をする(黄土高原国際民間緑色ネットワークの設立)

有機物の良性循環を達成するために必要な技術情報、ものの考え方を提供する。例えば



現在地方都市ではただ投棄されるに任されるようになっている糞尿を好気性発酵させることで無害化し、良質の有機液肥として地域に循環させるための技術導入を図る。またそれによって、化学肥料の投入を減らし、有機農産物の生産を加速させ、地域の土壌と水の汚染を低減させるほか、有機農産物の加工についても、積極的に提言を行い、地元の人々と協力して地域独自のものを作り出す。

黄土高原の重要な燃料として、石炭が用いられているが、石炭のなま焚きは硫黄酸化物を排出して深刻な大気汚染の原因となるほか、農家の家庭内の室内汚染による農民の呼吸器系の健康被害にも直結している。都市部においてはガス化が進みつつあるが、農村や都市の辺縁部におけるガス化は現実には不可能であり、またそのような解決策を求めるべきではない。そこで石炭とバイオマス、石灰を高圧圧縮してつくるバイオブリケットを地域に導入し、燃焼の過程から汚染物質を除去し、燃焼効率を上げることを目指す。この技術はバイオブリケット製造のための初期コストがかかり、また販売においても干高値になるため、まだ解決すべき課題が多く残されているが、地元の企業家や政策担当者との協力関係を模索することで少しずつ実現してゆく。

農村で家庭用合成洗剤が大量に使用されていることが飲み水の汚染につながっていることから、重曹電解水といった無害な洗浄液を普及させ、自分たちの飲み水を自らの手で汚染することの問題を認識するようにする。

「退耕還林」政策で、近年果樹やさまざまな草が栽培されているが、その販路は必ずしも開拓されておらず、政策による食糧補助が切れる数年後には、また元の木阿弥にならないとも限らない。政策的優遇がなされているこの期間に、「退耕還林」を経済利益につなげる試みが急務である。まずは有機栽培によるリンゴのさまざまな加工（ジャムやジュース）

それらの独自ブランド管理による主体性維持。多年草の漢方薬などから得られる製品の販路の拡大。など生態回復を促す経済的枠組みを模索する。

独自の文化や生活スタイル（窯洞建築など）に対する積極的な評価と自尊心を回復させるために、さまざまな文化芸術活動を展開する。例えば窯洞保存支援活動や、窯洞民宿によるエコツーリズムの模索、村に残された古い生活道具や衣服などの保存、継承などを行う。

以上のような活動は、村や地元の人々とともに、幾つかの援助申請などを組み合わせながら行っている。研究費としては三菱銀行国際財団、平和中島財団の助成を受け、援助としては日本政府の草の根無償援助（利民工程）などを現在申請中です。こうした試みの中から、開発援助のあり方についても提言を行い、またできるだけ援助に頼らない地域の循環システムの構築の道を探ろうというのが活動の趣旨です。

実績としては、陝西省榆林地区にこのほど高専から大学に昇格したばかりの榆林学院の実験農場に同地域初の「糞尿処理施設」を建設し、まもなく完成しようとしています。また、同榆林学院には、「黄土高原生態文化回復センター」を設立し、上記のプロジェクトはそのセンターの名前のもとに行っています。このセンターは固定したメンバーがいるわけではなく、また固定予算も持っていませんが、さまざまな技能を持つ人々が立ち寄ってはその力を発揮する、という持ち寄り型の活動拠点です。もし、今後プロジェクトに関わっていただける方がいましたら、ビザや在留身分などはこの榆林学院が受け皿となってくれます。また留学生も破格の値段で、とても行き届いた対応をして貰えて、大変「お得」です。留学先、居留先を考えている方、大西部開発と砂漠緑化の拠点であり、黄土高原にもアクセスのよい榆林学院を候補地に考えて見られてはどうでしょうか。

## 2003 年度研究会開催報告

研究担当理事 坪井 健

2003 年度は、関東地区で 15 回研究大会の前後に 2 回研究会を開催した。

### ・ 第 1 回研究会

2003 年 5 月 10 日(土)午後 1 時 30 分より  
駒沢大学第一研究館 4 階 文学部談話室  
話題提供者：大橋 史恵(東京外大 M 2 修了)  
「家政婦雇用に見る現代中国-家庭内労働の社会化とその変容-」  
参加者：約 10 名

発表時間は 20 分程度であったが、当日参加者と約 1 時間に亘って活発な議論が交わされ、中国社会と家庭の実情に関して、日中比較を含めて刺激的で示唆に富む意見が寄せられ、有意義な時間を共有した。

### ・ 第 2 回研究会

2003 年 7 月 5 日(土)午後 1 時 30 分より  
駒沢大学第一研究館 4 階 文学部談話室  
話題提供者：李 珊  
(東京都立大学都市科学研究科博士後期課程)  
「1959 年から現代まで誰が居民委員会の委員をやったか。-3 人のケーススタディから見る年住民組織の変容と実態-」参加者：約 8 名

約 30 分の報告の後、1 時間以上中国社会の末端組織の現実について参加者と活発な意見交換が行われた。居民委員会に関心を寄せる参加者が多く、それぞれの研究体験を踏まえて本音の意見交換が有意義であった。

### 会員の研究動向

首藤明和著『中国の人治社会  
- もうひとつの文明として』  
(日本経済評論社 2003 年)

日本や欧米社会では、生産、再生産の領域を問わず、近代的な計算合理性がもたらす人間疎外の問題が、日常生活にすっかりと馴染んでしまった。今日の日本などは、周囲(家族や親戚も含めて)にひとりの知り合いがい



なくとも、とりあえずは生活していくことができるような社会だといえる。一方、中国の現代化では、后台人や世話役などの存在が、民衆にとってはいつまでたっても切実な問題であり続ける。計算合理的な予測が成り立ちにくい民衆生活においては、将来において直面するかもしれないさまざまなリスクに備えて、できるだけ多くの人間関係を築いておく必要がある。結局、リスクを無数の人物に分散することでリスクの縮減に努める 包的構造とは、個人の経験世界における喜怒哀楽を、できるだけ多くの人々と分かち合おうとする、中国民衆の生き方そのものに他ならない。生き方としての 包 なのである。「近代化」のなかの社会では、人々の生き方とは、サブシステム的な意味合いのなかで従属的な地位に甘んじてきた。しかし「現代化」のなかの社会では、あくまでも 包的構造を支える人間個々人の資質が、第一義的な意味を持ち続けている。私たちが近代社会の抱える疎外の問題を自覚すればするほど、生き方としての 包 は、人間の自立や尊厳を考える上で、たいへんユニークな素材となって眼前に立ち現れてくるのである(拙著「終章」より)。

### 事務局から

・ 日中社会学会 2003 年度第 3・4 回理事会報告  
【第 3 回理事会(拡大)報告】10 月 12 日 中央大学  
出席：根橋、中村、首藤、鈴木、東、細萱(記録)  
< 審議事項 >

1. 選挙管理委員会の委嘱について  
今年度実施する選挙の選挙管理委員会を以下の三名に委嘱することを決定した。  
委員長：米林義男 委員：富田和広、東美晴
2. 機関紙の年 2 回発行について  
前回の理事会からの継続審議になっている機関紙の年 2 回発行について引き続き審議がなされた。事務局からは、現在の機関紙予算額の範囲でしか、対応は無理であることが報

告された。会計担当から、近年の会費納入率、本年の予想収入などと合わせて、現在の予算額でも、支出超過になりやすい構造となっていることについて説明があった。一方、現在の機関誌の掲載量などを考えると、2分冊化の意義は大きいとの意見もあり、経費削減の方策と合わせて、抜き刷り有料化、大学図書館への納入の拡大など、収入の拡大のための方策を議論すべきであるという意見が強く述べられた。さらに、2分冊化を企図する場合には、査読担当者などの人材ニーズが拡大することも予測されるため、査読委員会の設置や編集委員会の増員を検討するべきとの意見が出された。

また、機関誌販売に関わる問合せ先、申し込み方法などを明示化し、周知するように事務局へ要望が出された。機関誌の販売について、長期的には流通ルートにのせる方策を考えるべきとの意見が述べられた。

これらの将来的課題については、次期理事会も含めて継続的に審議する必要が述べられた。

3．長期活用・永久保存できるような研究資料、交流資料の作成について

1) 中国の研究者リストなど、日中交流の基礎資料の作成、学会・シンポジウムの記録、モノグラフ出版などについて検討するべきとの意見が述べられた。

2) 特に、大会時の報告プログラムの機関誌への記載については、この観点から検討すべきだと意見が述べられた。また一方で、現在報告希望者の審査をしていないこと、報告資料などの管理も行っていないこと、掲載に関わるコストなどから、機関誌への記載とするのか、ニューズレターへの記載とするのかなども合わせて検討するべきだと意見が述べられた。

4．会員異動 事務局案を承認した。

5．その他

・次年度大会のテーマについて、大会担当幹事が出席者の意見を聴取した。

・再来年の大会について、日韓シンポジウム

を企画検討中である旨、中村理事から報告があった。

・学会の資金繰りについて、IISの経費も含めて、寄付金を集めることを考えるべきとの意見が述べられた。

<報告事項>

1．秋季研究集会について：周知に努めるよう申し合わせをした。

2．IIS担当幹事から、次回大会（北京）のエントリーの方法などについて報告があり、IIS事務局の方針を確認した上で、会員に向け一層のコミュニケーションにつとめるとの報告があった。

**[第4回理事会（拡大）報告]11月9日 大阪ガーデンパレス**

出席：根橋 飯田 陳 富田（記録） 東 首藤 鈴木 屋葺

<審議事項>

1．会員異動 事務局案を承認した。

2．来年度の大会について

大会担当理事および実行委員長より、シンポジウムについて複数の提案があり、いくつか意見がだされたが、大会担当理事と開催校役員とで相談して決めていただくことになった。

3．機関誌について

1) 機関紙の年2回発行について

「学会規模から考えて、年2回発行は多い。」

「現状でも業務が遅れているので無理ではないか」「予算的に難しい」などの意見がだされたが、次期理事会で引き継ぎ検討してもらうことになった。

2) 図書館などへの販売について

図書館などは定期購読になることが多いが、現在、会員以外に定期的には販売しておらず、その場合は団体会員になってもらうよう案内していると事務局から発言があった。バックナンバー申し込み先は、事務局（庶務委員会）であることをニューズレターに明記し、バックナンバーに関する業務は、臨時的措置として6月までは全て事務局で行うことにする。機関誌に関する業務は、編集委員会臨時的措置で、次期理事会においては、編集委員会を増員する等して編集委員会で対応することが確認された。なお、庶務委員会の業務項目追加にともない、上水流久彦会員に庶務委員会

幹事を委嘱することが承認された。

#### 4. その他

事務局より、秋期研究集会の会計は一般会計で処理したいという申し出があり、承認された。

##### < 報告事項 >

#### 1. 科研の申請について

会長から、日中社会学会で科研を申請する予定であることが報告された。中村会員を代表者として「脱オリエンタリズムを目指した東アジア発展の構想」というテーマで、代表者と分担者をあわせて10名、外国人協力者9名で申請をした。さらに、別のテーマで東会員を代表者として申請を行う。

## 会員異動

### 日中社会学会ニュースレターNo. 40

発行：日中社会学会事務局

〒734-8558 県立広島女子大学国際文化学部富田和広研究室

TEL 082-251-9851 FAX 082-251-9405

E-mail [tomita@hirojo-u.ac.jp](mailto:tomita@hirojo-u.ac.jp)

----- 郵便振替口座番号：00140-9-161801 -----

編集担当（第40号）：鈴木未来

〒603-8143 京都市北区小山上総町 大谷大学総合研究室

TEL075-432-3131(内)3307 FAX 075-411-8427

（2004年3月31日まで）

E-mail [suzuki-m@ss.ritsume.ac.jp](mailto:suzuki-m@ss.ritsume.ac.jp)

公式HP: <http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Labo/5938/>

発行日：2004年1月 日

